

創価学会の池田名誉会長が逝去されてから、ユーチューブにかつて側近だった方々の池田会長の品格についてのいろいろな解説が出てきています。そのこと自体に私はあまり関心はありませんが、宗教団体としての在り方が大きく変わったのが1991年に創価学会自体が日蓮正宗（しようしゅう）から破門にされたことで、信仰の対象がなくなっただけで、池田会長への個人崇拜が進んでいったと内部告発者の方々が一応に言っていることは注目に値します。

日蓮大聖人を祀る富士大石寺で直接礼拝することができなくなったことで、具体的な信仰の対象が突然消えてしまったわけです。このことがきっかけで池田大作会長個人への崇拜が学会内で強くなったというのです。礼拝の対象であった日蓮大聖人の総本山大石寺（たいせきじ）から破門されたことで、当時の池田会長への個人崇拜が強まったということらしいです。

けれども、池田会長への個人崇拜が強まることで、逆に池田会長個人の実像に疑問を抱く側近が増えてきたことで、いろいろな醜聞が囁かれることになったようです。プロテスタントの場合、カトリックと違って、カトリックの総本山であるバチカンに対する信仰心、特にローマ教皇個人に対する敬愛という個人崇拜ということはないわけですね。

私たちプロテスタントの立場で言えば、総本山バチカンに対する信仰心とか、ローマ教皇個人に対する信仰心とかではなくて、イエス個人に対する信仰心しかないわけですね。それは、聖書がいろいろな言語に翻訳されて、イエスがどのような生きられたのかを福音書によって直接知ることができることが大きいと思われまます。カトリックの教会堂を見ると、ステンドグラスでイエスの宣教の様子が美しく描かれていて、文字が読めなくても、カトリック教会の内部に入るとわかりやすくイエスのことが絵画などによっても描かれています。

ですから、カトリックでは長らくラテン語で礼拝がなされていたわけですが、多くの民衆はラテン語のことが理解できなくてもよかったです。現在は、ミサもそれぞれの言語で進行されていますが、ひと昔前はラテン語で行われていたのです。このような傾向に歯止めをかけたのが、カトリックとプロテスタントの聖書学者が共同で翻訳をするという世界的な流れです。日本では新共同訳聖書の登場によって、カトリックのミサも大きく変わりました。

新共同訳はイエスという呼称についても、カトリックがイエズスという表記にこだわらずに、イエスに統一することに同意したことで、両者の距離感が大きく縮まりました。いずれにしても、私たちプロテスタントはイエス個人への信仰をもって、自分たちの信仰の拠り所としていますから、バチカンや神父個人への信仰心という媒介を必要としないのです。

ですから、イエスの生き方そのものが私たちが生きる上での模範であり、真理になってくるわけです。

18章33節以下の箇所では、ローマの総督であるピラトがイエスを尋問するところが描かれています。最初ピラトはローマの法律で裁くことを嫌がっているようです。31節でピラトはイエスを連れてきたユダヤ人たちに「あなたたちが引き取って、自分たちの法律に従って裁け」と言っていることでも、ピラトがイエスをローマの法律で裁くことに躊躇しているように見受けられます。

ところが、ピラトが「お前がユダヤ人の王なのか」と質問したことで、イエスが「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聴く」といったところで、ピラトは「真理とは何か」という根本的な質問をイエスに向けて問うことになったのです。

このヨハネ福音書のやり取りを見ると、ピラトが、真理そのものであるイエスのことに気づく一歩手前まで問答の中でたどり着いていることがわかります。ピラトは「真理とは誰か」と聞きたかったのですが、自分がイエスの処刑に関わることを避けたいがために、その一言が言えなかったのです。

最初、ユダヤ人や大祭司たちから否応なしにイエスをローマ法によって処罰することを求められたピラトは、「わたしはあの男に何の罪も見いだせない」と言っていたので、イエスを過越祭に一人釈放する慣例になっていたのですが、ピラトはイエスを釈放してほしいのかとユダヤ人たちと祭司長たちに問いたかったです。ピラトはイエスに何の罪も見いだせないと言うのが精一杯だったのでしたが、このような厄介ごとには関わらないという生き方そのものが、彼をして真実な生き方へと弓を勧めることをできなくさせているのです。だから、真理を見出そうという気概も生まれてこないのです。

イエスご自身は真理について証しをするために生まれてきたと言っているように、真実な生き方を人々に指し示すためにこの世に来たと言っています。最後に、この証しということについて考えてみたい。証しとは、人間が何を発見したかを語ることはありません。神が人間に何をなされたかを発見することであり、その神のみ業を証しすることです。つまり、神に向かう人間の誠実さを証するのではなく、人間に向かい給う神を語ることに証氏なのです。

ときどき、ファンダメンタルな信仰心を持つ方が、自分の神に対する篤い信仰心を自慢するような話をする場合がありますが、それは真理についての証しではないのです。何よりもまず、神が自分の人生という舞台の上で、どのようなみ業を成してくれているかを見つめていくことが心理に至る信仰心となるのです。